

鈴木智夫 著

近代中国と西洋国際社会

〈汲古書院・二〇〇七年七月・vii+三三三頁〉

本書は前著『洋務運動の研究』（汲古書院、一九九二年）の上梓以後、著者が紀要等に発表してきた「近代中国と西洋諸国・西洋国際社会との関係」をめぐる諸論文を中心にまとめたものである。第一章「万国博覧会と中国」以外の各章は、いずれも清末に活躍した——しかし専門家以外にはほとんど知られていない——官僚たちの特定の時期の活動にスポットライトが当てられている。それぞれ手堅い実証研究として洋務運動研究や清末外交史研究に一石を投じるものであるが、同時に、中国と西洋との交渉・交流の最前線で活動した彼らの日記や報告は、文化交流史、比較文化論という視点からも十分に興味深い。本書の面白さの半分はそちらのほうにあるように感じられた。そのうちの一人祁兆熙は、清朝最初

の公費海外留學事業であつた遣米留學生団の第三陣の「護送委員」として、三〇名の「幼童」を引き連れてアメリカに渡つた人物である。著者による祁の渡米日記の綿密な紹介・分析（第二章）は、未知の異文化に戸惑いながら、強い使命感をもって任務を完遂しようとした祁の緊張をよく伝えている。

使命を見事に果たした祁は、しかしこの留學事業の欠陥も鋭く見抜いていた。「幼童」たちは異国の地で「西学」と「中学」の併習が課されていたが、どちらも中途半端になり、帰国後「洋務」のための有能な人材にはなれない。そもそも官話能力すら不十分ではないか。そこで祁は、院試合格の「生員」で一五歳以下のものから留學生を選抜し、彼らが「西学」を専修して帰国すれば郷試合格の「举人」の資格を与えるという改革案を提案する。しかし、その場合でさえ、留學生に「中学」の自修を誘導せよと述べられている（第三章）。「中体西用」とは洋務運動の哲学的概括などではなく、そ

の担い手にとつては極めてアクチュアルな課題であつたことがよくわかる。

このほか、一八七六年のフィラデルフィア万博視察のため派遣されたながら、苦境にある海外華人の実情把握を密かに自らの使命として課した浙江閩文牘李圭（第四章）、義和團事件の謝罪特使として醇親王載灃がドイツに派遣された際、特使一行に押しつけられた屈辱的儀礼を改めるべく知略をめぐらせた駐独公使呂海寰（第五章）、日露戦争の間に、立憲制導入などの国政改革に取り組み、戦後の講和会議を超越して周到な対応策を策定すること提案した駐露公使胡惟徳（第六・七章）——これらの人物はいずれも著者のいう「西洋の衝撃」と「東洋（日本）の衝撃」に対抗して中国を近代化させようという「対抗的近代化」の推進者たちである。彼ら「東南沿海地方出身の開明派」の強烈な使命感や優れた洞察力、高い実務能力がいつたい何に由来するものか、考えさせられるところである。（砂山幸雄）